

沖縄における14世紀～16世紀の中国産白磁の再整理

付. 14～16世紀の青磁の様相整理メモ

New Perspective on Chinese Ceramics Unearthed in Okinawa of the 14-16c

新垣 力・瀬戸哲也

ARAKAKI Tsutomu・SETO Tetsuya

ABSTRACT: A large quantity of East Asian ceramics was introduced to Okinawa in the Gusuku Period. The major component, Chinese ceramics of the Late Medieval period (14c-16c) has been studied in terms of the classification and chronology; however, they need to be reconsidered in light of new information and recent excavations. This paper attempts to re-organize and analyze Chinese celadon and white porcelain, referring to the latest studies. As a result, celadon could not be classified exhaustively, but white porcelains are divided into two major production groups, Fujian (福建) kilns and Jingdezhen (景德镇) kilns. It is also noted that the quantity of excavated white porcelains of the former kiln group surpasses the latter throughout the Gusuku period.

1. はじめに

グスク時代の沖縄には、東アジア各地から大量の舶載陶磁器がもたらされている。中でも大多数を占める14世紀～16世紀の中国産陶磁器は早くから研究の対象となり、多くの分類・編年が作成された。しかし、近年の研究成果により新たな知見や考古資料の蓄積が進んでおり、現状を見直す必要があると思われる。今回は、沖縄出土の中国産白磁について碗・皿を中心に、最近の研究成果等を用いて今一度の整理・検討を試みたい。

白磁の分類・編年は、横田賢次郎・森田勉が大宰府出土資料を用いて作成した分類及び編年案（横田・森田1978、以下大宰府旧分類とする）を嚆矢として、14～16世紀の白磁を対象とした森田勉の分類・編年案（森田1982、以下森田分類とする）、博多遺跡群出土の陶磁器分類案（福岡市教育委員会1984、以下博多分類とする）、山本信夫によって追加・修正が施された大宰府編年案（太宰府市教育委員会2000、以下大宰府新分類とする）が主なものである。沖縄では、これらを基礎に金武正紀が提示した分類・編年案（金武1988・1989・1990、以下金武分類とする）が一般に用いられている。

こういった中で、福建省の生産地資料からのアプローチを行った田中克子の分類案（田中2003、以下田中分類とする）が近年、クローズアップされている。沖縄では、従来指摘されているように、福建地方の白磁が多く出土しており、田中の研究は非常に重要である。また、近年の首里城跡の調査では、いわゆる「枢府磁」の系統を引く白磁もまとまって出土しており、景德镇窯系の様相もより具体的になってきつつある。

そこで、本稿では、沖縄出土の白磁を①福建・広東系白磁、②景德镇窯系白磁、の2種に大別し、それぞれを上記の先行研究と対比させる形で分類を行う（第1表）。

また、今回、「14～16世紀の青磁の様相整理メモ」を付章とした。本来ならば、青磁についても白磁同様の視点で体系的な分類までに踏み入れるつもりであったが、力及ばずまとまったものとはならなかった。しかしながら、この作業過程についてはある程度の参考になるのではないかと考えたので、赤恥を覚悟の上で掲載することにした。

2. 福建・広東系白磁（第1図、第2図）

沖縄から出土する白磁の大半を占め、当該期全体を通じて出土している。以下に分類案を記す。

A類（1～9）

口縁部周辺の釉薬を施釉後に掻き取る口禿のもので、金武分類の口禿碗・皿に対応する。器種は碗と皿があり、それぞれ器形と施釉方法から2種類に大別される。

碗Ⅰ：胴部が球形に張り、高台の断面形態が方形を呈する。釉薬は内底から高台際または高台まで施釉され、内底に陰圏線を1条廻らせる（1）。

Ⅱ：Ⅰに比して胴部の張りが弱く、畳付外縁に面取りが施される。釉薬は内底から外面腰部まで施釉され、高台は露胎。内底に陰圏線を1条廻らせる（3）。

皿Ⅰ：高台を持たない小形の浅皿。施釉方法及び器形の差異から3種類に細分される。

I-a：碗Ⅰに対応するもの。胴部中位で内側に湾曲し、外底面がわずかに上げ底状を呈する。釉薬は内底から外面腰部まで施釉され、口禿にはならない。無文（2）。

I-b：碗Ⅱに対応する。腰部にやや丸みを持ちながら直線的に開く端反口縁のもので、外底面がわずかに上げ底状を呈する。釉薬は内底から外面腰部までの施釉だが、外底にも雑に塗布する。器高の低いもの（4）と高いもの（5）の2種がある。いずれも無文。

I-c：bと同様に碗Ⅱに対応する。基本的な器形はbに似るが、口縁部が直口し、底部が上げ底にならない。施釉方法はbと類似するが、外底には釉薬を塗布せず露胎のままとしている。bと同様に、器高の低いもの（6）と高いものがある（7）。いずれも無文。

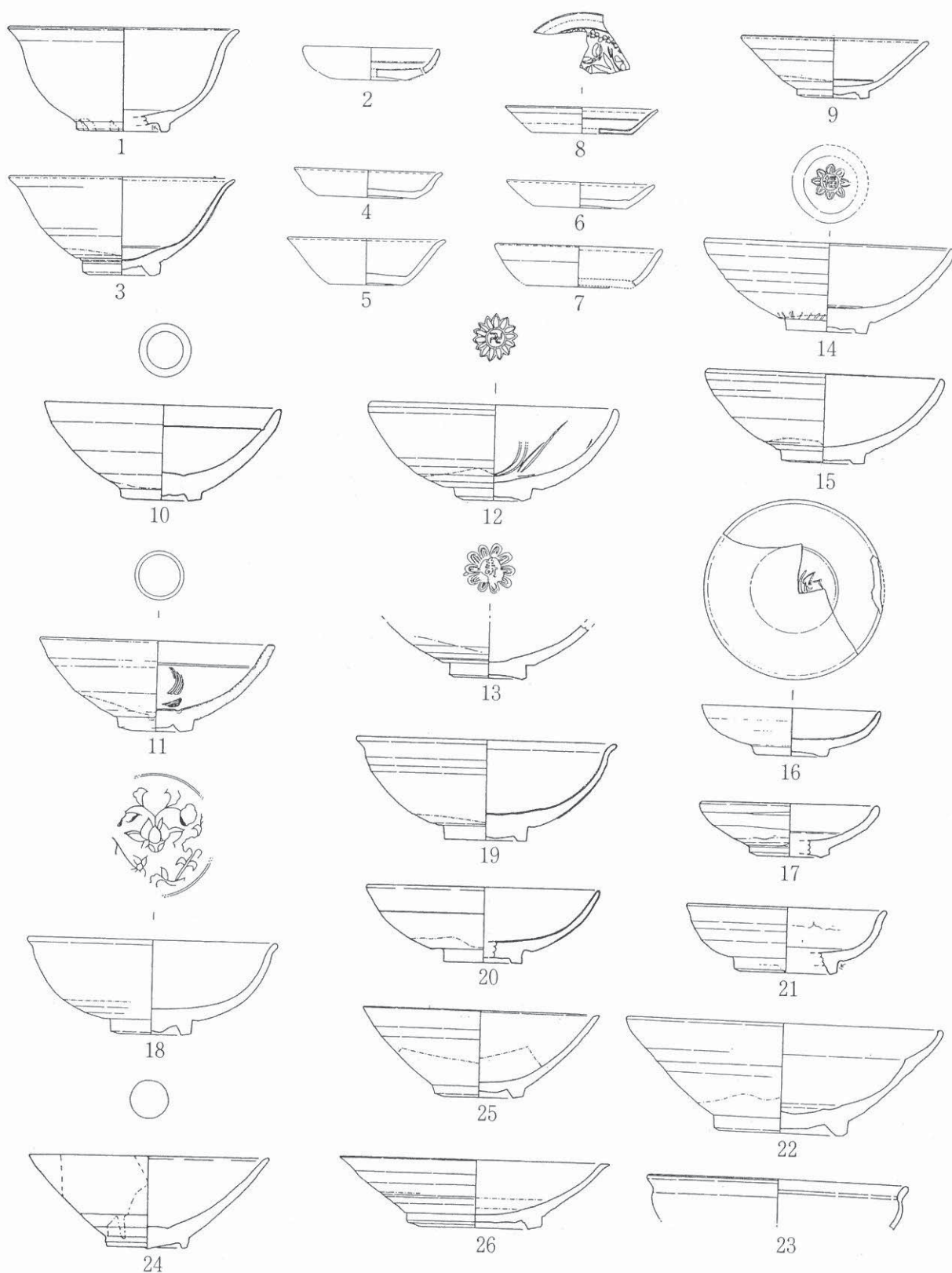
I-d：b、cと同器形だが薄手で底部が上げ底にならないもの。釉薬は内底から外面腰部まで施釉する。内底に陰圏線を廻らせ、印花文を施す（8）。

Ⅱ：体部が斜上方に直線的に開き高台を持つもの。成形が雑で器面全体に調整痕が残る。高台の断面形態は方形で全体が「ハ」の字状を呈し、接地面は畳付内端のみとなる。釉薬は内底から外面腰部まで施釉。内底に陰圏線を1条廻らせる（9）。

A類碗は大宰府旧・新分類の碗Ⅸ類、博多分類の口ハゲの白磁碗、森田分類のA群碗、田中分類のH類にそれぞれ比定される。細分類では碗Ⅰが大宰府旧・新のⅨ類-1、博多分類の口ハゲの白磁碗1、Ⅱ類は大宰府旧・新分類のⅨ類-2、博多分類の口ハゲの白磁碗2に相当する。森田分類は両者を一括しており、田中分類には碗Ⅱのみが含まれる。

生産地は碗Ⅱに限定されるが、田中によって閩江以北沿海部寧徳地区の窯と同定されている。年代は今帰仁城跡主郭9、7層（今帰仁村教育委員会1991）の出土例から13世紀末が初現と考えられるが、拝山遺跡（沖縄県教育委員会1987）や広島県尾道市街地遺跡（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所1978）ではいわゆる龍泉窯系青磁の劃花文碗と共伴しているため、13世紀後半まで遡る可能性もある。終末は沖縄の例では確認できないが、韓国・新安沖海底遺跡（國立中央博物館1977）の出土状況から14世紀前半と考えられる。大宰府新分類では13世紀中頃から14世紀初頭前後の標識資料で、13世紀後半～14世紀前半に増加するとしており、田中分類では13世紀前半に出現し、やはり13世紀後半から14世紀前半に多くみられるとしている。

皿Ⅰは細かい分類が実施されている。I-aは大宰府新分類のⅧ類-1'、博多分類の口ハゲの白磁平底皿1、田中分類のK類-5に相当し、特に博多分類と田中分類では後述する皿Ⅱの口縁部総釉資料と捉えられている。生産地は素地や釉薬の特徴から福建省内と思われるが、現時点では情報が少なく判然としない。年代は今帰仁城跡主郭7層（今帰仁村教育委員会1991）の出土状況から13世紀末～14世紀初頭に位置付けられ、大宰府新分類では13世紀に到って出土する傾向があるとしている。



A類 (1～9)、B類 (10～23)、C類 (24～26)

1・13・17・21 (銘苅原遺跡)、3・8・9・11・12・15・19・23・25・26 (今帰仁城跡主郭)、
2・4～7・18・22 (今帰仁城跡志慶真郭)、10 (ピロースク遺跡)、14 (屋良グスク)、
16 (稲福遺跡)、20 (首里城跡御庭地区)、24 (住屋遺跡)

第1図 沖縄出土の白磁1 (福建・広東系1) 縮尺1:4

I-bとcは広く知られているもので、それぞれ大宰府旧・新分類の皿Ⅸ類、博多分類の口ハゲの白磁平皿2と3、森田分類のA群皿、田中分類のK類-5に比定されている。細分類ではI-bが大宰府旧・新分類のⅨ類-1、博多分類の口ハゲの白磁平皿2、I-cが大宰府旧・新分類のⅨ類-2、博多分類の口ハゲの白磁平皿3に相当するが、森田分類と田中分類では両者を一括している。I-dは大宰府新分類のⅩ類-bに相当し、Ⅱは器形に若干の差異があるが、大宰府新分類のⅨ類-3、博多分類の口ハゲの白磁高台付皿、田中分類のH類に類似の資料がみられる。

このI-b・cは碗Ⅱとセット関係にある製品と考えられるため、生産地も同じく閩江以北沿海部の寧徳地区の窯と推定されるが、I-dとⅡに関しては生産地が異なる可能性もある。I-b・cの年代は今帰仁城跡主郭7層（今帰仁村教育委員会1991）の出土例から13世紀末～14世紀初頭と考えられるが、広島県尾道市街地遺跡（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所1978）や長崎県鷹島海底遺跡（森本1993）の出土状況をみると、初現は13世紀後半まで遡る可能性も高い。終末は拝山遺跡（沖縄県教育委員会1987）やビロースク遺跡（石垣市教育委員会1983）、福岡県大宰府史跡第45次SX1200（九州歴史資料館1978）の出土例から14世紀前半と想定される。しかし、石川県普正寺遺跡地山面からも少量ながら出土しているため（石川県立埋蔵文化財センター1984）、14世紀後半との位置付けも一概に否定し難い。皿I-d及びⅡは今帰仁城跡主郭7層（今帰仁村教育委員会1991）から確認されているが、当該資料は出土例が少なく不明な点が多いため、今回はⅡと近い年代であろうとの指摘にとどめる。大宰府新分類では13世紀後半～14世紀前半、森田分類では13世紀中頃～14世紀前半、田中分類では13世紀前半から出現し、13世紀後半～14世紀前半に多くみられるとしている。

B類（10～23）

高台内削りの浅い厚手の製品。器種は碗・皿・鉢があり、器形や文様から碗は3種、皿と鉢は2種に大別される。

碗Ⅰ：体部は直線的に開くが、口縁部直下でやや内側に屈曲する。口唇部は外側が尖り、内面口縁部には陰圏線を1条廻らせる。高台の断面形態は方形で、接地面は畳付内端のみである。釉薬は内底から外面腰部まで施釉する。文様は内底に幅広の陰圏線を廻らせるもの（10）と、内面胴部に櫛描文を描き、内底に幅広の陰圏線を廻らせるもの（11）がある。金武分類のビロースクタイプ碗Ⅰに相当する。

Ⅱ：体部が内湾するもの。口縁部は丸みを持つが、口唇部内端に稜を持つものが多い。高台形態はⅠに似るが底径はⅠより広く、畳付全体を接地面とするものもある。施釉方法はⅠと同様。文様は内面胴部に櫛描きで花卉文を描き、内底に印花文を施すもの（12）、内底に印花文のみを施すもの（14）がある。無文のもの（15）がある。金武分類（金武1989）のビロースクタイプ碗Ⅱに相当する。

Ⅲ：器形はⅠに似るが、腰部が大きく張り口縁端部が外反するもの。高台の形態はⅡに類似し、施釉方法はⅠ・Ⅱの双方と共通する。内底に陰圏線を1条廻らせ、その中に印花文を施す（18）。端反口縁にならないもの（20）もあるが量的には少ない。金武分類（金武1990）の外反碗に相当する。

皿Ⅰ：体部が内湾するもので、口縁部は丸みを持ち口唇部内端に稜を持つ。高台内削りは浅く接地面は畳付内端のみである。釉薬は内底から外面腰部まで施釉する。内底に陰圏線を1条廻らせ、その中に印花を施す（16）。碗Ⅱに対応する。

Ⅱ：Ⅰに比して胴部が大きく張り端反口縁を呈するもの。高台形態は碗Ⅲに類似し、釉薬は内底

から高台際まで施釉する。内底に陰圈線を廻らせる(21)。碗Ⅲに対応する。

鉢Ⅰ：体部を斜上方に立ち上げるもので、内面胴部には蓋受部と考えられる突帯が廻る。畳付外縁に面取りが施され高台内側は斜めに削られる。釉薬は内底から外面腰部まで施釉。無文(22)。

Ⅱ：鼈甲口口縁のもの。口縁部資料のため胴部以下の器形及び文様の有無は不明(23)。

B類碗は大宰府新分類の碗C類、森田分類のC群碗、田中分類のJ類にそれぞれ比定され、細分類では碗Ⅰが大宰府新分類のC類-1、碗ⅡとⅢが田中分類のJ類-1と2に相当する。ちなみに、大宰府新分類では碗ⅡとⅢをまとめてC類-2としており、森田分類は3種類を一括している。

生産地は、以前曾凡が報告した南平葫芦山窯出土資料の中に碗Ⅱが確認されており(曾凡1988)、田中によれば閩江中流の南平から下流域と、河口から以北東沿海部一帯の窯群と推定される(田中2003)。碗Ⅰについては判然としないが、素地や高台造りからⅡと生産地を同じくする可能性が高い。また、碗Ⅰ類の器形及び文様がいわゆる同安窯系櫛描文青磁碗に類似していることから、当該グループの消長・展開を考える上で重要な資料と考えられる。

年代は、碗ⅠとⅡは今帰仁城跡主郭7層の出土例から13世紀末～14世紀初頭と想定されるが、Ⅰは出土例が少なく終末期など不明な点が多い。ただ碗Ⅰは前述したように同安窯系青磁の系統を色濃く残すと思われるので、Ⅱより若干古いとする金武の説(金武1989)には賛成したい。碗ⅠとⅡは韓国・新安沈船資料(国立中央博物館1977)から14世紀前半までの出土が認められるが、同遺跡からはⅢが出土せず今帰仁城跡主郭5層(今帰仁村教育委員会1991)では両者が共伴するため、下限は14世紀中頃と考えられる。碗Ⅲは韓国新安沈船資料にみられないこと(国立中央博物館1977)、今帰仁城跡で最も多く出土していること、首里城跡での出土量が極端に少ないことなどから、金武が述べるように1383年～1415年を中心に招来されたと考えられ(金武1988)、おおむね14世紀後半～15世紀初頭に位置付けられる。しかし、福岡県大宰府史跡第109・111次SD3200では嘉元2年(1304)銘の卒塔婆に共伴する出土例もあるため(九州歴史資料1989)、初現が14世紀前半、あるいは14世紀初頭まで遡る可能性も否定できない。森田分類(森田1982)では15世紀前後、田中分類では碗Ⅱは13世紀末～14世紀中、碗Ⅲは14世紀後半～15世紀初頭としている。

皿は器形の特徴から碗Ⅱとのセット関係が考えられるが、内底の印花文という碗Ⅲの要素も併せ持つ資料である。田中が最近提唱したビロースクⅣ類の皿形品に相当すると考えられるため、(森本・田中2004)生産地も必然的に閩江中流の南平から下流域と、河口から以北東沿海部一帯の窯群が想定される。本標品は稲福遺跡(沖縄県教育委員会1983)や銘苅原遺跡(那覇市教育委員会1998)で出土しているものの、双方とも包含層出土であり年代の特定までは至っていない。器形や文様の特徴から判断すると碗ⅡとⅢの重複する時期、すなわち14世紀全搬との位置付けが妥当であろうか。

鉢はいずれの分類にもみられない。鉢Ⅰは類例が青森県十三湊遺跡(国立歴史民俗博物館1998)とベトナム・ダイラン遺跡(森本1996)から出土している。これらは内底に蛇の目釉剥ぎと印花文を施す点が異なるが、器形の特徴は一致する資料である。年代は前述の2遺跡に加えて今帰仁城跡志慶真郭(今帰仁村教育委員会1983)の出土状況から14世紀～15世紀に収まると判断されるが、素地や釉調が碗Ⅲに類似するため同様の産地が指摘され、時期的にも14世紀の後半頃に盛期を持つと考えられる。鉢Ⅱは好資料に恵まれず、出土例も現在のところ今帰仁城跡主郭(今帰仁村教育委員会1991)に限られているが、素地及び釉調が鉢Ⅰに類似すること、共伴遺物が14世紀以降の製品で占められることなどから、産地・年代ともに鉢Ⅰに近いと思われる。今後類例の増加を待ちたい。

C類 (24~26)

幅広の高台から体部を斜上方に立ち上げる器形の低い碗。器形と施釉方法から2種に大別される。

碗Ⅰ：底部が肉厚のもので、口唇部内端に稜を持つ。内底、外底ともに中央部が突出し、内底面に陰圏線を廻らせる。釉薬は内底から外面胴部まで施釉。無文(24)。

Ⅱ：口唇部内端の稜がⅠに比して明瞭なもので、高台は「ハ」の字状に開き畳付内端を接地面とする。器形や施釉方法により2種類に細分される。金武分類の薄手直口碗に相当する。

Ⅱ-a：釉薬は内面胴部から外面胴部まで施釉し、内底と外面腰部以下は露胎となるもの。無文(25)。

Ⅱ-b：aに比して器形の低い浅碗。釉薬は内底から外面胴部まで施釉した後、内底を蛇の目状に釉剥ぎする。無文(26)。

C類は田中分類のG群に確認されるが、当該分類は碗Ⅱのみを提示している。碗Ⅰの生産地は判然としないが、A類碗ⅡやB類碗Ⅰに共通する特徴的な内底形態を有しているため、これらとの関係で出自・系統を考えることが可能であろう。一方、碗Ⅱは田中によると閩江河口近くの連江一帯の窯群とされている。年代は今帰仁城跡主郭9、7層(今帰仁村教育委員会1991)の出土例から13世紀末~14世紀初頭に位置付けられるが、長崎県鷹島海底遺跡からも確認されているため(森本1993)、初現は13世紀後半まで遡ると考えられる。終末は今帰仁城跡主郭1~4層(今帰仁村教育委員会1991)で少量ながらB類碗Ⅲとの共伴関係がみられること、マレーシア・ジュアラ遺跡(森本1991)で類品が出土していることから、14世紀中頃~後半まで下る可能性もある。田中分類では13世紀後半~14世紀前半に多くみられるとしている。

D類 (27~46)

底部が肉厚で腰部の張りが強い小振りの製品。器種は碗・皿・杯があり、器形の特徴から碗と皿は4種類、杯は3種類に大別される。

碗Ⅰ：口縁部が大きく外反するもの。高台の断面形態は方形で畳付の外端に面取りが施され、高台内削りは浅い。釉薬は内底から高台外面まで施釉され、内底に目跡が確認される。無文(27)。

Ⅱ：Ⅰに比して腰部の張り、口縁部の外反が弱いもの。高台の形態はⅠに似る。釉薬は内底から外面腰部まで施釉した後、内底を蛇の目状に釉剥ぎする。無文(39)。

Ⅲ：器形はⅡに似るが器面全体に調整痕が残る厚手のもので、内面口縁部に稜を持つ。高台の形態はⅠに類似する。釉薬は内面胴部から外面胴部まで施釉し、内底と外面腰部以下は露胎。内底に目跡が確認されるものもある。無文(41)。

Ⅳ：Ⅲの亜種と考えられる薄手の碗で、Ⅲに比して素地が硬質である。口縁部内端に稜を持ち、高台内削りはアーチ形を呈する。施釉方法はⅢに類似するが、施釉範囲はⅢより小さい。内底に陰圏線を廻らせる(44)。

皿Ⅰ：口縁端部が舌状で器肉が厚く、外面に調整痕が残るもので、碗Ⅰに対応する。器形の特徴から2種類に細分される。

Ⅰ-a：胴部にやや膨らみをもたせながら斜上方に開くもので、高台の断面形態は方形で畳付外縁または両端に面取りを施す。釉薬は内底から外面胴部まで施釉する。無文(28)。金武分類の内彎皿に相当する。

Ⅰ-b：腰部が張り端反口縁を呈するもので、高台の断面形態は方形で畳付外端に面取りを施す。釉薬は内底から外面腰部まで施釉。無文(29)。

I－c：直口口縁の小皿。平高台のもの（30）と4～5ヶ所抉りを入れるもの（31）があり、出土例は後者が多い。釉薬は内底から外面胴部まで施釉するが、器面全体に施釉するものもある。内底に目跡が確認される。無文。金武分類の挟入高台皿に相当する。

II：器形はI－cに似るが高台造りが厚く、I－cに比して底径が小さい。内底から外面胴部まで施釉した後、内底を蛇の目状に釉剥ぎする。無文（40）。碗IIに対応する。

III：碗IIIに対応するもの。器形の特徴から2種類に細分される。

III－a：器形はIIに似る薄手の皿で、器面全体に調整痕が残る。高台内削りは浅く畳付外端の面取りは雑である。釉薬は内面胴部から外面腰部まで施釉する。無文（42）。

III－b：口縁端部がわずかに膨らみ外底が上げ底状を呈する平底皿。素地は軟質で器肉は厚い。釉薬は内面のみに施釉され、口縁部に煤が付着するものもある。無文（43）。金武分類の燈明皿に対応する。

IV：碗IVに対応するもの。器形の特徴から2種類に細分される。

IV－a：III－aの亜種と考えられるもので、腰部の張りが強い内湾器形の皿。高台内削りはアーチ状を呈し畳付を水平に切る。釉薬は内面胴部から外面腰部まで施釉する。無文（45）。

IV－b：器形はIII－bに似るが、口縁端部が方形を呈し上げ底にならないもの。素地は硬質で器肉は薄い（46）。施釉方法及びその他の特徴はIII－bと同様。金武分類の燈明皿に対応する。

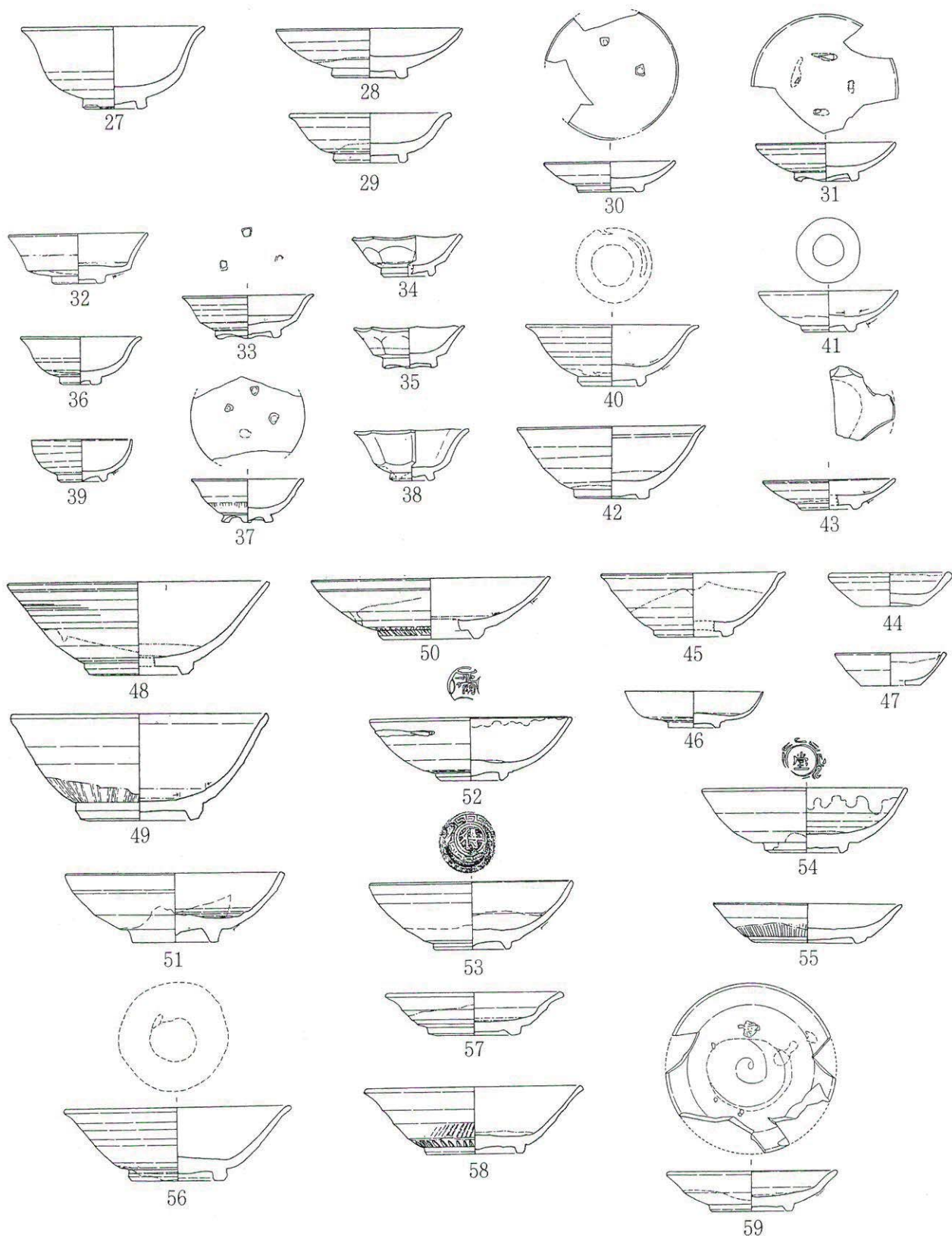
杯I：腰部で屈曲し明瞭な稜を持つもの。器形の特徴から通常の腰折杯（32、33）と、外面に面取りを施したいわゆる八角杯（34、35）に大きく分類され、それぞれ平高台のものと挟入高台のものがあり、後者は内底に目跡が確認される。釉薬は内底から外面胴部まで施釉。すべて無文。

II：腰部が張り体部に丸みを帯びるもので、Iと同様に通常の外反杯（35、36）と八角杯（37）に分類される。高台形態及び施釉方法もIに類似する。無文。

III：半球形の胴部を持つ直口口縁の杯。高台の断面形態は方形で畳付外端に面取りを施す。釉薬は内底から外面腰部まで施釉。無文（38）。

D類碗はいずれの分類にもみられないが、碗Iと同様の素地・高台形態を有する皿Iが森田分類のD群に含まれる。この種の皿は邵武四都窯が生産地の一つと指摘されているため（田中2002）、碗Iも生産地を同じくする可能性が高いと思われる。年代はIとIIIは今帰仁城跡主郭1～4層（今帰仁村教育委員会1991）の出土例から14世紀後半以降、IIは首里城跡京の内SK01（沖縄県教育委員会1998a）の出土例から15世紀中頃に位置付けられる。IVは今帰仁城跡志慶真郭（今帰仁村教育委員会1983）から出土しているが、年代の推定できる好資料に乏しい。しかし15世紀から遡らせることは難しいと思われる。

皿は森田分類のD群に相当するが、その他の分類にはみられない。田中により邵部四都窯が生産地の一つとして紹介されているが（田中2002）、沖縄及び日本での出土量を考えると閩江上流域一帯の窯群まで範囲が広がると想定される。皿Iの年代は今帰仁城跡主郭1～4層（今帰仁村教育委員会1991）の出土例から14世紀後半以降、皿IIからIVは前述の今帰仁城跡に加えて首里城跡京の内SK01（沖縄県教育委員会1998）、名蔵シタダル遺跡（沖縄県立博物館1982）、湧田古窯跡行政棟I区（沖縄県教育委員会1993）などの出土例から14世紀後半～16世紀に位置付けられるが、福岡県博多遺跡群第40次4号土壙（福岡市教育委員会1990）や島根県富田川河床遺跡第7次4、5遺構面（島根県教育委員会1983）からは出土しないため、16世紀前半が上限と推定される。しかしIII－bとIV－bは金武



D類 (27~47)、E類 (48~55)、F類 (56~59)

27~29・31・33・35・36・42・45・46・48・52・54(今帰仁城跡主郭)、30・37・55・57・58(湧田古窯跡行政棟地区)、32・41(越来グスク)、34(喜屋武グスク)、38・44(今帰仁城跡志慶真郭)、39・47・50(天界寺跡西区)、40・59(首里城跡京の内地区)、43(湧田古窯跡地下駐車場地区)、49(銘苅原遺跡)、51・53(天界寺跡東区)、56(慶来慶田城跡遺跡)

第2図 沖縄出土の白磁2 (福建・広東系2) 縮尺1:4

が15世紀～16世紀と設定しているもので（金武1990）、現時点の考古資料からも14世紀代まで遡らせることは難しい。また、I - a・bに関しては前述の湧田古窯跡から確認されていないことから、15世紀代で姿を消す可能性もある。

杯は森田分類（森田1982）のD群とE群の一部に相当する。前述の碗Ⅰや皿と素地・高台形態・釉調に多くの類似点があることから、田中の紹介した邵武四都窯を生産地の候補の一つに挙げることができる（田中2002）。年代は越來グスク（沖縄市教育委員会1988）、首里城跡京の内SK01（沖縄県教育委員会1998a）、今帰仁城跡主郭1～4層（今帰仁村教育委員会1991）、湧田古窯跡行政棟Ⅰ区（沖縄県教育委員会1993）などの出土例から14世紀後半～16世紀頃に位置付けられるが、福岡県博多遺跡群第40次4号土壙（福岡市教育委員会1990）や島根県富田川河床遺跡第7次4、5遺構面（島根県教育委員会1983）からは確認されていない。よって16世紀前半が上限と想定される。森田分類（森田1982）では15世紀後半～16世紀代の遺跡から出土するが、14世紀後半から使用されていたとしている。

E類（47～54）

逆台形の高台を持ち畳付の外縁を削るもの。成形は雑で器面全体に調整痕が残る。器種は碗と皿があり、器形と施釉方法から2種類に細分される。

碗Ⅰ：体部は直線的に開くがやや丸みを持ち、口縁部は直口するもの（47）と若干外側に開くもの（48）がある。外面腰部に飛鉋が廻り、高台内削りは深い。釉薬は内底から外面胴部まで施釉した後、内底を蛇の目状に釉剥ぎする。無文。

Ⅱ：体部が内湾する器高の低い碗。口縁部は舌状を呈し、口唇部内端に明瞭な稜が残る。釉薬は内面胴部から外面胴部まで施釉し、内底と外面腰部以下は露胎。無文のもの（50）と内底に印花文を施すもの（51～53）がある。金武分類の厚手直口碗に相当する。

皿Ⅰ：体部や直線的に開くがやや丸みを持ち、口縁部は舌状を呈する。外面腰部に飛鉋が廻り、高台内削りが深い。釉薬は内底から外面胴部まで施釉した後、内底を蛇の目状に釉剥ぎする。無文（49）。碗Ⅰに対応する。

Ⅱ：Ⅰに比して小振りの皿。胴部から底部にかけて肉厚となり、高台内削りも浅い。外面腰部に飛鉋？が廻る。釉薬は内面胴部から外面胴部まで施釉し、内底と外面腰部以下は露胎。無文（54）。碗Ⅱに対応する。

E類碗は、田中が最近提唱した「内底輪状釉剥ぎ・露胎碗」にまとめられている（森本・田中2004）。また形態的な特徴では前述のD類碗Ⅳにも近いので、これらを同一グループとして捉えることも可能かと思われる。生産地は現在のところ判然としないが、田中によれば邵武四都窯に本標品と同形態の高台を持つ白磁があるとされる（田中2002）。年代は今帰仁城跡主郭1～4層（今帰仁村教育委員会1991）の出土状況から14世紀後半～16世紀頃と推定されるが、包含層出土資料のため詳細な設定は難しい。

皿も「内底輪状釉剥ぎ・露胎碗」（森本・田中2004）の皿形品と解することができる。皿Ⅰは天界寺跡西区から出土しているが（沖縄県立埋蔵文化財センター2002）、包含層出土資料のため詳細な年代は不明である。よって今回は碗Ⅰの年代観を援用して14世紀後半～16世紀頃としておきたい。皿Ⅱは湧田古窯跡行政棟Ⅰ区（沖縄県教育委員会1993）、島根県富田川河床遺跡第7次4、5遺構面（島根県教育委員会1983）、福岡県博多遺跡群第40次4号土壙（福岡市教育委員会1990）の出土例から16世紀頃と考えられる。

F 類 (55～59)

体部が逆「ハ」の字状に大きく開き、畳付外端が面取りされるもの。器種は碗と皿がある。

碗：体部が外側に大きく開き、外面口縁部は玉縁状を呈する。高台の断面形態は方形で畳付外端が面取りされる。釉薬は内底から外面腰部または高台際まで施釉した後、内底を円形（57）または蛇の目状（55）に釉剥ぎする。無文。

皿：器形は碗に似るが胴部中位で屈曲し口縁部が端反を呈する厚手の皿で、口唇部に稜を持つものもある。高台は内側が斜めに削り出され畳付内端のみを接地面とする。釉薬は内底から外面胴部まで施釉した後、内底を円形（58）または蛇の目状（56）に釉剥ぎする。無文。

F類は、これまでの分類には見られない。しかしながら、57・59は水澤幸一が新潟県江上館跡等の日本海側の北陸・東北地方で、一定量出土することを指摘している。水澤は、このタイプを首里城跡京の内の資料を基準として「首里タイプ」と呼称している（水澤2004）。

碗は青磁にも同形態の製品があるが、両者は釉薬の色調や素地の焼成具合などのわずかな差異が認められるのみで、明確な分類は難しい。高台形態や施釉方法がD類碗Ⅳに類似するため、邵武四都窯を生産地とする可能性も考えられる。碗の年代は湧田古窯跡行政棟Ⅰ区（沖縄県教育委員会1993）や慶来慶田城遺跡（沖縄県教育委員会1997）の出土例から16世紀代に位置付けられるが、皿は今帰仁城跡主郭1～4層（今帰仁村教育委員会1991）、首里城跡京の内SK01（沖縄県教育委員会1998a）、湧田古窯跡行政棟Ⅰ区（沖縄県教育委員会1993）、新潟県馬場屋敷遺跡W区上層（川上1984）などの出土例から14世紀後半～16世紀頃と推定される。

3. 景德鎮窯系白磁（第3図）

浙江省景德鎮窯及びその周辺諸窯を生産地とするもので、14世紀後半から登場するが出土量は福建・広東系に比して少ない。以下に分類案を記す。

A 類 (60～62)

底部が肉厚で内側に斜行する幅広の高台を持つもの。器形の特徴から2種類に大別される。

碗Ⅰ：腰部が張り直口口縁を呈するもの。釉薬は内底から高台外面まで施釉する。無文（60）。

Ⅱ：Ⅰに比して底径が大きく、口縁部が外反すると想定されるもの。内底に陽圏線状の明瞭な稜が確認され、高台内側には少量だが砂が付着する。内面に型押しの陽刻文が施されるもの（61）と、無文のもの（62）がある。

A類は森田分類のいわゆる「枢府磁」であるB群そのものとは言い切れないが、その退化したB'群に相当もしくは近似すると思われる。典型的な「枢府磁」とされる森田分類B類は少なく、今回図示していないが、首里城跡二階殿地区出土の精巧な鳳凰文の碗破片（沖縄県立埋蔵文化財センター2005、第30図2）があるのみである。しかしながら、金沢陽が検討したインドネシア・トゥバン海域引き揚げ資料（金沢2001）の「枢府」銘白磁碗を含む一群の高台づくりが非常に類似している。この資料は、景德鎮湖田窯産と推定されるもので、時期的には14世紀中頃～後半に位置付けられる。

B 類 (63～69)

高台形態や施釉方法がA類に似る外反口縁の製品。器種は碗と皿があり、器形の特徴からそれぞれ2種類に大別される。

碗Ⅰ：口縁部が外反する薄手の碗。底部の形態は不明だが、おそらく皿Ⅰに類似すると考えられる。内面に陽刻の龍文を施す（63）。

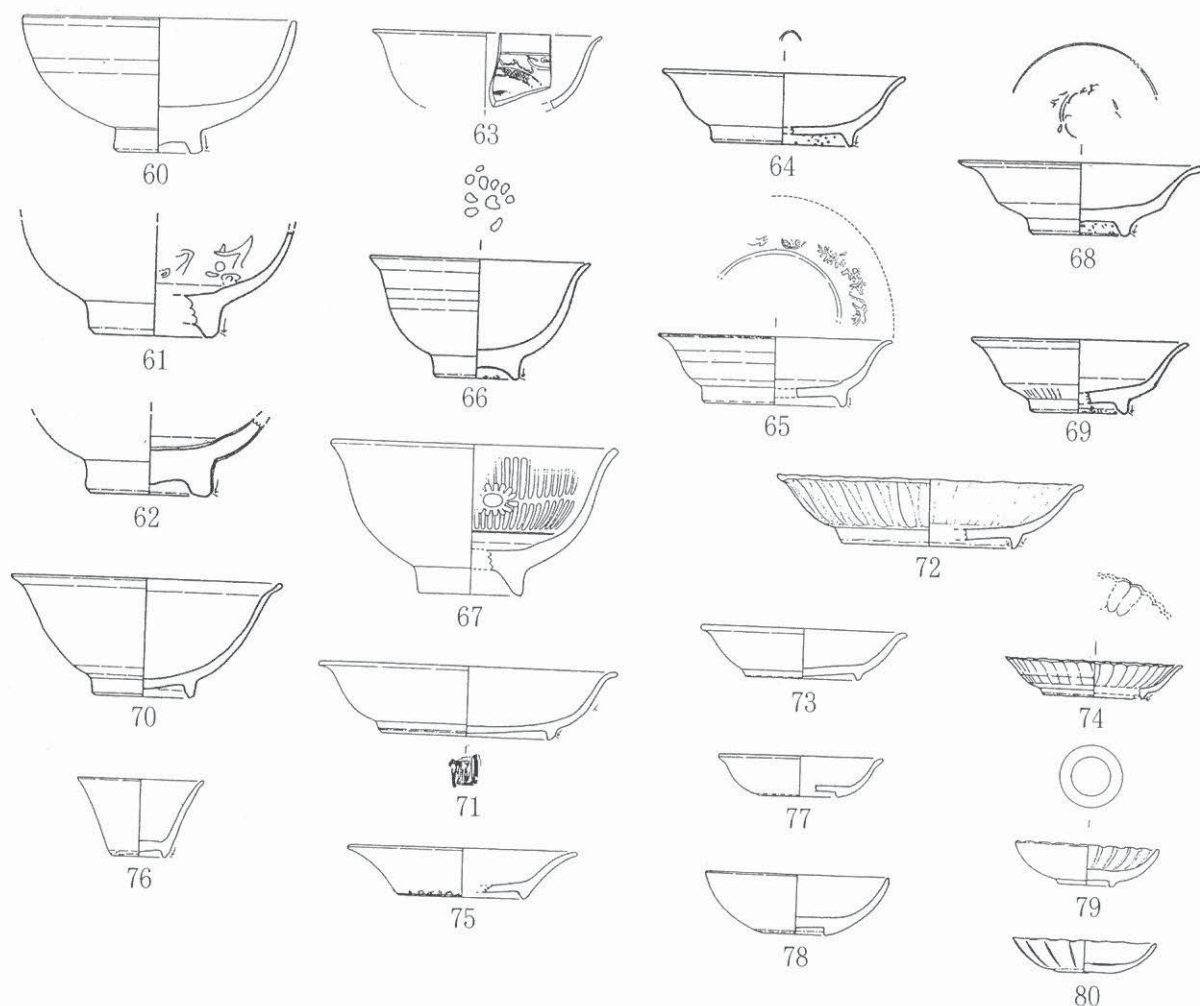
Ⅱ：器形はⅠに似るが器肉が厚く、高台内削りがアーチ形を呈するもの。釉薬は内底から高台外面まで施釉する。A類と同じく高台内側に砂が付着するものもある。文様は内底に印花文？を施すもの（66）や、内面胴部に陽刻の草花文を施すもの（67）がある。

皿Ⅰ：口径に比して底径が大きい外反口縁の皿で、碗Ⅰに対応するもの。高台内削りは若干アーチ形で畳付外端に面取りが施される。釉薬は内底から高台外面まで施釉し、高台内側に砂が少量付着する。文様は内面に陽刻の唐草文を施すもの（65）と、無文のもの（64）がある。

Ⅱ：碗Ⅱに対応すると考えられる。腰部で屈曲し口縁部が端反を呈するもので、口縁端部はわずかに玉縁状に膨らむ例も確認されている。施釉方法及び高台内側の状況は皿Ⅰと類似する。

文様は内底に陰圏線を廻らせて中央に草花文を描くもの（68）と、無文のもの（69）がある。

B類はいずれの分類にもみられないが、器形・施釉方法・施文方法などA類碗Ⅱに近似する特徴を有しているため、枢府磁系統の製品群であることは間違いなからう。年代は今帰仁城跡志慶真郭（今帰仁村教育委員会1983）や首里城跡二階殿落ち込み（沖縄県立埋蔵文化財センター2005）の出土状況や、同器形の色絵碗や染付碗が首里城跡京の内SK01（沖縄県教育委員会1998a）から出土しているこ



A類（60～62）、B類（63～69）、C類（70～80）

60（首里城跡京の内）、61・62・64・66・68・69（首里城跡二階殿地区）、63・71（天界寺西区）、65・76（首里城跡下之御庭跡地区ほか）、67・79（今帰仁城跡志慶真郭）、70（尻並遺跡）、72（天界寺跡中区）、73・77（今帰仁城跡主郭）、74（円覚寺跡）、75（安仁屋トゥンヤマ遺跡）、78・80（湧田窯跡行政棟地区）

第3図 沖縄出土の白磁3（景德鎮窯系） 縮尺1:4

とから、おそらく14世紀後半～15世紀中頃と思われる。ちなみに、皿Ⅱに器形の似た資料が景德鎮瑶里窯産として報告され、博多遺跡群の出土例から14世紀末～15世紀初頭に位置付けられている（高島・田中2004）。

C類（70～80）

失透性の釉薬を全体に施釉した後、畳付を釉剥ぎする薄手のもの。器種は碗・皿・杯があり、碗と杯は単体だが皿は3種類に大別される。

碗：胴部にやや丸みを持ちながら開き、口縁部を外側に折り曲げるもの。内底中央部は円錐状にくぼみ、いわゆる「蓮子碗」に近い形態となる。高台は方形だが畳付両端に面取りが施される。無文（70）。

皿Ⅰ：全体的な器形はB類皿Ⅰに似る外反口縁の浅皿。器形の差異から3種類に細分される。

Ⅰ－a：器高さの低い外反口縁の皿で、薄造りのためか底面にへたりがみられるものもある。口径が15cmを超えるもの（71）と、10～12cmの範囲に収まるもの（73）があり、前者は外底に呉須で銘が施される。

Ⅰ－b：器形はaに似るが器面及び口唇部に篋削りを加え、上面観が菊花形に仕上げるもの。aと同じく大形のもの（72）と小形のもの（74）がある。

Ⅰ－c：底部から直接ラッパ状に開く外反皿で、サイズとしてはaやbの小形のものに近い。畳付周辺に砂が付着するものもある。無文（75）。

Ⅱ：底部が碁笥底を呈するもの。口縁端部をわずかに外反させるもの（77）と、直口口縁におさめるもの（78）がある。いずれも無文。

Ⅲ：直口口縁を呈する小形の菊花皿だが、Ⅰ－bに比して成形は雑である。底部に高台を持つもの（79）と平底のもの（80）がある。基本的には総釉後に畳付または外底を釉剥ぎするが、79のように内底を蛇の目状に釉剥ぎする例もある。

杯：底部からラッパ状に立ち上がる蕎麦猪口形の杯で、皿Ⅰ－cに対応するもの。釉薬は内底から高台外面まで施釉し、外底は露胎。無文（76）。

C類は森田分類のE群に相当するが、同時期の染付製品の素地とも考えられるため、小野正敏の染付編年（小野1982）を援用する手法も有効と思われる。年代は今帰仁城跡主郭1～4層（今帰仁村教育委員会1991）、尻並遺跡（沖縄県立埋蔵文化財センター2003）、湧田古窯跡行政棟Ⅰ区（沖縄県教育委員会1993）などの出土状況から16世紀頃と推定される。森田分類（森田1982）及び小野分類（小野1982）でもほぼ同様の年代観が提示されている。

4. 結語

今回、沖縄で出土する14～16世紀の白磁について、まず福建・広東系と景德鎮窯系に分けて、分類を行ってきた。基本的には、従来の森田分類を大きく外れることはない。しかしながら、特に福建・広東系においては、生産地の動向を追求した田中の研究（田中2002・2003）を援用することによって、より詳細な生産地を意識した分類を提示することができたのではないかと考える。また、景德鎮窯系でも、沖縄ではそれ程多く出土していなかった、いわゆる枢府系の要素を持つ一群が、近年の資料の増加により、「枢府磁」により近いA類、その系譜を引くがやや後出するB類と、明確にできたのが成果と言えよう。

結論としては、従来指摘されたように、福建・広東系が終始主流を占め、景德鎮窯系が14世紀後半

から搬入され始めるということであろう。今後の発掘事例の増加、生産地での研究の深化により、修正点も生じると思うが、現状での分類案として提示したい。諸氏の検証・批判・教示を戴きたく思う。

本稿は、新垣が分類の素案を作成し、原稿を主に執筆した。瀬戸は、景德鎮窯系A・B類の整理を行うなどの補助的な役割を果たした。ただ、分類の大枠は相互が同意するまで議論を尽くした。

付. 14～16世紀の青磁の様相整理メモ（第4・5図）

本来ならば、本稿において、青磁の分類試案についても提示したいと考えていた。しかしながら、青磁に関しては白磁ほどの成果を挙げることが出来なかった。その原因は、当然、当方の力不足のためであるが、確かに沖縄では本土では見られないタイプの青磁が出土しているものの、年代・産地を考慮した結果、先行研究である大宰府分類（横田・森田1978）、新大宰府分類（大宰府市教育委員会2000）、上田分類（上田1982）、金武分類（金武1989・1990・1997）などに少しも新たな知見を加えることが出来なかったからである。ただ、沖縄における14～16世紀の青磁の様相について、近年の資料を用いて作業を進めたため、一つの整理メモの役割程度にはなると思い、本稿の付録として掲載することにした。

今回の14～16世紀の青磁を再整理・確認にあたっては、先述した既往の分類を参考にして各遺跡の出土状況を検討すると、おそらく次の大きく4つの画期に分けられると推測している。そこで、まず便宜的に4つの画期ごとの様相を見ていく中で検討することにした。

I期（13世紀末～14世紀前半）

II期（14世紀中葉～14世紀後半）

III期（14世紀末～15世紀中葉）

IV期（15世紀後半～16世紀）

I期（81～87）

大宰府Ⅲ類とされる、高台が小さく細いタイプで畳付のみ釉剥ぎするものを指標とする。碗は、全体的に内湾する器形で、文様はやや細めの鎬連弁文（81・82・84）が多く、無文、また口縁を輪花状にさせるもの（83）がある。皿（杯）は、口縁が外へ直角に折れ曲がる器形で、文様は外面が鎬連弁文か無文、内底には貼り付け双魚文のものもある（85～87）。釉調はいわゆる砧系とされる青緑色のものが典型的である。

今帰仁城跡主郭7層では、これらと共に新大宰府Ⅱ類や白磁福建・広東系A類、B-I・Ⅱ類が出土している。その他、首里城跡二階殿地区落ち込みでは15世紀中葉までの陶磁器と共に出土しているが、112点の大宰府Ⅲ類及びⅢ'類が出土している。現在のところ、沖縄では出土遺跡も首里城跡・今帰仁城跡に限られ、量的には多くないと思われる。

既往の分類から13世紀末～14世紀前半と考えたい。

II期（88～109）

既往の分類では、大宰府Ⅳ類や上田C-I・D-I類に相当もしくは近いものを指標とする。この時期のものは、大宰府分類でも説明されているように、完成された分類ではなく、量的に少ないこともあって、非常に捉えにくいものである。横田賢次郎・山本信夫・森本朝子が1323年銘を有する新安沈船資料との比較で、この14世紀中葉のものを抽出しようとした（横田・山本・森本1989）。本稿では、この横田・森本・山本の論考にならって、次の特徴でこの時期のものを抜き出した。

高台は前代に比べるとやや細い角形か（89・93・97・100・109）、畳付が広くなり内側のみが斜行する

表1 沖縄出土の白磁分類試案と既往の分類との対応一覧

産地	分類	器種	細分類		沖縄分類 (金武1989・90ほか)	大宰府分類		博多分類 (福岡市教委1984)	白磁分類	
			大	小		横田・森田1978	太宰府市教委2000		森田1982	田中2003
福建・広東系	A類	碗	I	—		白磁碗Ⅸ-1	白磁碗Ⅸ-1	口ハゲの白磁碗1	A群碗	
			Ⅱ	—	口禿碗	白磁碗Ⅸ-2	白磁碗Ⅸ-2 a	口ハゲの白磁碗2		H類
		皿	Ⅰ	a			白磁皿Ⅷ-1'	平皿1		K類?
				b	口禿皿	白磁皿Ⅸ-1	白磁皿Ⅸ-1	口ハゲの白磁平皿2	A群皿	K類-5
				c		白磁皿Ⅸ-2	白磁皿Ⅸ-2?	口ハゲの白磁平皿3		
				d			白磁皿Ⅸ-3?		A群皿?	
			Ⅱ	—	口禿碗		白磁皿Ⅹ-b			H類?
		碗	Ⅰ	—	ビロースクタイプ碗Ⅰ				C群碗	
			Ⅱ	—	ビロースクタイプ碗Ⅱ					J類-1
			Ⅲ	—	外反碗					J類-2
		皿	Ⅰ	—	ビロースクタイプ皿					
			Ⅱ	—						
	鉢	Ⅰ	—							
		Ⅱ	—							
	C類	碗	Ⅰ	—	薄手直口碗					G類かH類?
			Ⅱ	a						G類
			Ⅱ	b						
		碗	Ⅰ	—						
			Ⅱ	—						
			Ⅲ	—						
			Ⅳ	—						
	D類	皿	Ⅰ	a	内彎皿				D群坏	
				b						
				c	袂入高台皿				D群坏	
			Ⅱ	—						
			Ⅲ	a						
				b	燈明皿					
		杯	Ⅳ	a						
				b	燈明皿					
			Ⅰ	—					C~E群坏	
			Ⅱ	—						
	E類	碗	Ⅰ	—	薄手直口碗					F類
			Ⅱ	—	厚手直口碗					
		皿	Ⅰ	—						
			Ⅱ	—						
	F類	碗	—	—	幅広高台碗					
		皿	—	—						
景德鎮窯系	A類	碗	Ⅰ	—	枢府系				B'群碗	
			Ⅱ	—						
	B類	碗	Ⅰ	—						
			Ⅱ	—						
		皿	Ⅰ	—						
			Ⅱ	—						
	C類	碗	—	—					E群碗	
			Ⅰ	a	薄手外反皿				E群皿	
				b						
				c						
		皿	Ⅱ	—						
			Ⅲ	—						
	杯	—	—	—					E群坏	

もの(94・98・105～108)、外底は無釉であることを第一の特徴とした。碗の器形では、総じて腰の張りが低い位置にあるものが多く、口縁が緩やかに外反するもの(88・89・97～100)があることなどが特徴であろう。皿は前代よりも口折がゆるく、浅めの器形が多いと思われる(102・103)。また、文様の特徴として、沖縄で弦文帯と称される口縁外面に数条の圈線が巡るもの(88～91・98)や、蓮弁が複線で描かれるもの(95・102・103・107)などが特徴である。また、沖縄では束口碗(101)は、大宰府Ⅲ類よりも新しい傾向をもつもの、すなわちこの時期のものが少量見られる。他の特徴としては、釉調がⅠ期の青緑色というよりも水色に近いもの、Ⅲ期の深緑色よりも淡い透明質の黄緑色などが多いということも参考にはなるだろう。

これらも前代と同様にやはり出土数が少ないが、今回改めて各遺跡を見ると、Ⅰ期の段階よりもやや多い印象を受けた。ただ、まとまって出土しているのはやはり少ない。今帰仁城跡主郭Ⅵ・Ⅴ層では、共に白磁福建・広東系A類・B-Ⅲ類・C類が出土している。他に、拝山遺跡でも大宰府Ⅱ類、白磁福建・広東系A類・B類と共に出土している。首里城跡二階殿地区落ち込みでは、やはり15世紀中葉までの遺物とともに、これらの特徴のものが、整理に携わった筆者の感覚では少なくとも全体の1割程度は出土しているのではないかと思っている。

時期的には、新安沈船資料以降の年代ということで、14世紀中葉～後半と考えたい。

Ⅲ期(110～142)

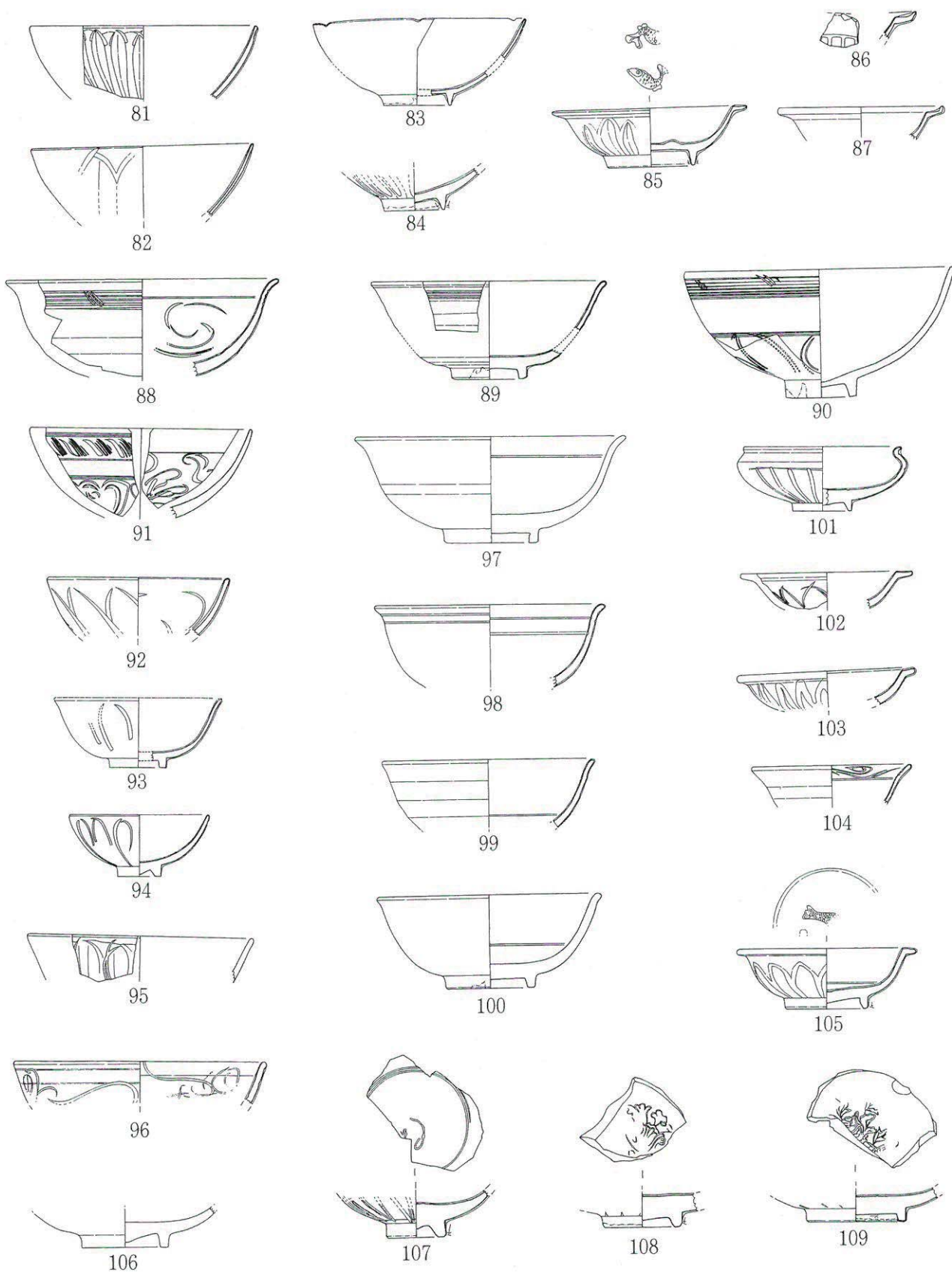
この時期が沖縄で最も陶磁器が多く出土する時期であり、年代観の確定が切に望まれている時期でもある。しかしながら、肝心のこの時期の細分を表すタイプ及び具体的な出土状況を決めかねているのが現状である。今回もそれを十分に整理することは力不足であった。ただ、近年の大きな成果である、文献から1454・1549年の火災による一括資料とされる首里城跡京の内SK01資料(沖縄県教育委員会1998a)には、金武が設定した佐敷タイプ碗(金武1990)が出土していないことを注目して、仮に2つの段階を設定した。

Ⅲ期-①段階(110～129)

佐敷タイプ碗とされる、外底無釉で底部が厚く、高台外側が竹節、内底釉剥ぎ、玉縁口縁となるものを指標とした(110・111)。これに対応する玉縁口縁皿(113・114)もあることは、金武が指摘している(金武1990)。このタイプと共伴するものとして、外反口縁碗(118・119)や金城亀信が指摘した(金城2000)ラマ式蓮弁文碗(123)、上田B-Ⅱ類つまり無鎬蓮弁文碗の中でも太い明瞭な輪郭の蓮弁を有するもの(115・120)や外面上半に圈線を有するもの(116・117・122)、口縁端部に刻みを有するもの(121)などが挙げられる。皿では、浅めの口折皿(124・125)、口縁が直線的な直口皿(126)、次段階よりも胴部の外反が弱い腰折皿(127～129)などが相当しようか。

このタイプが多く出土するのは、佐敷グスクや今帰仁城跡志慶真郭、越來グスク、首里城跡北殿トレンチ造成層などがある。白磁の共伴関係を見ると、福建・広東系B-Ⅲ類や、同皿D-Ia類でも口径10cm以上の大きいサイズのものが出土している。また、首里城跡二階殿地区SB4下層では、この玉縁口縁皿が多く出土しており、後述する雷文帯碗、上田C-Ⅱ類が出土していないのが特徴である。このことから、Ⅲ期のなかでも古相と考える。

また、瀬戸が管見で検討した結果、佐敷タイプ碗が多く出土する遺跡では、雷文帯碗が多く出土するところはないと認識している。この認識は、水澤幸一が日本海側の北陸・東北地域の資料で検討したように、雷文帯碗は14世紀後半・末にはなく、15世紀でも中葉ではないかとするに近い(水澤2004)。しかしながら、この点はさらに厳密な検討を行った結果で判断したい。この段階に雷文帯碗を図示していないが、全くなかったとは考えてはいない。雷文帯碗でも、135のようなやや深めの器



I 期 (81~87)、II 期 (88~109)

81・87・88~91・93~95・100~102・104 (今帰仁城跡主郭)、83・97 (今帰仁城跡志慶真郭)、82・84~86・92・96・103・105・107~109 (首里城跡二階殿地区)、98・106 (拝山遺跡)、99 (首里城跡北殿地区)

第 4 図 沖縄出土の青磁 1 縮尺 1:4



Ⅲ期一①段階（110～129）、Ⅲ期一②段階（130～143）、Ⅳ期（144～150）

110（今帰仁城跡志慶真郭）、111・119・144・145（今帰仁城跡主郭）、112～114・120～124・127・129・135・143（首里城跡二階殿地区）、115～118・126・128（首里城跡北殿地区）、125・130～134・136～142（首里城跡京の内）、146～150（湧田古窯跡行政棟地区）

第5図 沖縄出土の青磁2 縮尺1:4

形で、丁寧な文様のものは古手ではないかと推測される。ただ、現状ではそれを裏付ける資料はないので、首里城跡京の内ではこのタイプのものは少ないという指摘に留める。

Ⅲ期—②段階（130～143）

首里城跡京の内SK01で多く出土する、上田C—Ⅱ類つまり線刻の雷文帯碗（135～138）、型押し
の雷文帯碗（143）、蓮弁が不明瞭な蓮弁文碗（133）、弁先を共有しない細蓮弁文碗（130）を指標
とする。皿では、前段階よりも外反が強い腰折れ皿（149）、八角皿（142）、稜花皿、胴部が内湾す
る直口皿（140・141）がある。この段階の外底は、碗・皿の多くが蛇の目釉剥ぎされられると思われる。

これらの資料自体は、多くの遺跡で通常出土しているが、量的には、京の内を含めた首里城跡各地
区の出土が最も多いと思われる。白磁の共伴関係は、福建・広東系D類が主体である。

このⅢ期の全体の時期幅は、既往の分類と首里城跡京の内から14世紀末～15世紀中葉と考えられる。
ただ、仮に設定した2つの段階が、大きく新古の様相をもつのは確かと思うが、具体的な年代に置き
換えられるほどの検討は行えていない。

Ⅳ期（144～150）

この時期の指標は、上田B—Ⅳ類、すなわち線刻細蓮弁文碗（144～146）と、それに共伴する直線
的に外反する腰折皿（149・150）となる。碗の高台が前代よりも、高くなっているのが特徴であらう
か。湧田古窯跡が良好な資料である。時期は、既往の分類から15世紀後半～16世紀代と思われる。

今後に向けて

以上、既往の分類を適用して、沖縄での出土状況から、14～16世紀の青磁の様相を探ってみた。し
かしながら、遺跡における出土状況などの客観的なデータ提示も非常に不十分なもので、思いつきの
メモにしか過ぎない。

ただ、Ⅱ期は新安沈船資料との比較による抽出、一方Ⅲ期は首里城跡京の内SK01資料との比較に
よりさらに新旧に分けることは、一つの方法であると思われる。この方法は、森本朝子がベトナム産
陶磁器の沖縄への搬入時期を検討するために行ったものを参考にしている（森本2002）。今後、底部
の処理方法や釉調、文様の細部などを、厳密に各資料について検討していかなければならない。その
ため、本章はあくまでも当方の整理メモ程度に受け止めていただきたい。

本付章は瀬戸が、首里城跡二階殿地区落ち込み資料を整理する中で、考えついたメモである。新垣
もこの視点には賛同しているが、雷文帯碗の年代観などには若干の相違点がある。本付章については、
吉岡康暢、水澤幸一、片桐千亜紀、宮城弘樹、四氏の御教示が基礎になっている。記して感謝したい。

（あらかき つとむ：沖縄県教育庁文化課専門員）

（せと てつや：調査課 専門員）

引用・参考文献

- 石垣市教育委員会 1983『ビロースク遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター 1984『普正寺遺跡』
上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会
沖縄県教育委員会 1983『稲福遺跡発掘調査報告書（上御願地区）』
1987『拝山遺跡』
1992『安仁屋トゥンヤマ遺跡』
1993『湧田古窯跡（Ⅰ）』

- 1995『首里城跡－南殿・北殿の遺構調査報告－』
- 1997『慶来慶田城遺跡』
- 1998a『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』
- 1998b『首里城跡－御庭跡・奉神門跡の遺構調査報告－』
- 1999『湧田古窯跡（Ⅳ）』
- 沖縄市教育委員会 1988『越来城』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001a『天界寺跡（Ⅰ）』
- 2001b『首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』
- 2002a『天界寺跡（Ⅱ）』
- 2002b『円覚寺跡』
- 2003『尻並遺跡』
- 2005『首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書－』
- 小野正敏 1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会
- 嘉手納町教育委員会 1994『屋良グスク』
- 金沢陽 2001「インドネシア・トゥバン海域引き揚げの元代“樞府手”白磁と青花片」『出光美術館研究紀要第7号』出光美術館
- 川上貞雄 1984「新潟県馬場屋敷遺跡出土の陶磁」『貿易陶磁研究No.4』日本貿易陶磁研究会
- 九州歴史資料館 1978『太宰府史跡 昭和52年度発掘調査概報』
- 1989『太宰府史跡 昭和63年度発掘調査概報』
- 金武正紀 1988「ビロースクタイプ白磁碗について」『貿易陶磁研究No.8』日本貿易陶磁研究会
- 1989「沖縄における12・13世紀の中国陶磁器」『沖縄県立博物館紀要第15号』沖縄県立博物館
- 1990「沖縄の中国陶磁器」『考古学ジャーナルNo.320』ニュー・サイエンス社
- 1997「第2節 11世紀末頃～16世紀の遺物」『銘苅原遺跡』那覇市教育委員会
- 金城亀信 2000「青磁ラマ式蓮弁文碗について」『貿易陶磁研究No.20』日本貿易陶磁研究会
- 具志川市教育委員会 1988『喜屋武グスク』
- 国立中央博物館 1977『新安海底文物』
- 国立歴史民俗博物館 1998『幻の中世都市十三湊－海から見た北の中世－』
- 島根県教育委員会 1983『富田川河床遺跡発掘調査報告書－Ⅲ－』
- 曾凡（訳・亀井明德） 1988「南平葫芦山窯（福建省）についての初步的理解」『貿易陶磁研究No.8』日本貿易陶磁研究会
- 太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
- 高島裕之・田中克子 2004「景德鎮・明代瑤里窯跡出土の陶磁器」『亜州古陶瓷研究Ⅰ』亜州古陶瓷学会
- 田中克子 2002「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その二）－福建省閩江流域、及び以北における窯跡出土陶磁」『博多研究会誌第10号』博多研究会
- 2003「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その三）－宋・元代白磁をめぐる問題－」『博多研究会誌第11号』博多研究会
- 今帰仁村教育委員会 1983『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』
- 1991『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』
- 那覇市教育委員会 1998『銘苅原遺跡』

2000『天界寺跡』

平良市教育委員会 1999『住屋遺跡（Ⅰ）』

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1978『尾道一市街地発掘調査概要一』

福岡市教育委員会 1984「博多出土貿易陶磁分類表」『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ』

1990『博多15』

森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会

水澤幸一 2004「15世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相」『貿易陶磁研究No.24』日本貿易陶磁研究会

森本朝子 1991「マレーシア・ブルネイ・タイ出土の貿易陶磁器 11世紀末～14世紀末ー日本出土の貿易陶磁との差異」『貿易陶磁研究No.11』日本貿易陶磁研究会

1993「長崎県鷹島海底出土の「元寇」関連の磁器についての一考察」『博多研究会誌第2号』博多研究会

1996「中部ベトナム・ラムドン省ダイラン遺跡の陶磁器」『貿易陶磁研究No.16』日本貿易陶磁研究会

2002「ベトナム陶磁ー日本における研究の成果と課題」『東洋陶磁史ーその研究の現在ー』東洋陶磁学会

森本朝子・田中克子 2004「沖縄出土の貿易陶磁の問題点ー中国粗製白磁とベトナム初期貿易陶磁ー」『グスク文化を考える』新人物往来社

横田賢次郎・森田勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器についてー型式分類と編年を中心としてー」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館

横田賢次郎・森本朝子・山本信夫 1989「新安沈船と大宰府・博多の貿易陶磁ー森田勉氏の研究成果に寄せてー」『貿易陶磁研究No.9』日本貿易陶磁研究会